【新約】Fate/Reckless

とりえーる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

令和元年、水の都ヴェネチアで聖杯戦争が勃発する。

それも、冬木のもののような七騎全てが揃った大規模な聖杯戦争である。

この謎に満ちたバトル・ロワイアルに巻き込まれた日本からの留学生、久我蒼一（くがそういち）は生き延びることができるのか――

「少年少女よ、無謀であれ」

目次

第０節　Ｉｎｔｒｏ
終の始 ―― 1
第１節　怪奇との邂逅
謎の呼び出しと遭遇 ―― 5
美女と鎧 ―― 10
倍返し ―― 15

第０節　Ｉｎｔｒｏ
終の始

眼前には黒く染まった彼――
そして”ソレ”は私に迫ってくる。
ああ、救いは無い。
救いは無い、と言ってもこれから私が”ソレ”に呑まれることなどどうでもいい話だ。
自らの命すら彼に捧げても構わないと思えた。
彼のためならば自分が信じるモノ、自分を信じるモノ全てを裏切っても構わないと思えた。

もういない。
もういないのだ。
私が初めて１人の男性として愛した彼はもういないのだ。
彼がいないのなら何もかもどうでもいい。

呑まれる。
得体の知れない闇に私も呑まれていく。
……ああ……もういいか。
彼と同じ死に方ができる。
そうすれば彼のところに行けるかもしれない。
もうそれだけで十分なのだろう。

…意識が朦朧としてきた。
いつか生まれ変わった彼に会えたら、私を名前で呼んでくれるだろうか。
クラスではない、私の名前を。

ちゃんと、「――――――」と――――

否ッ!!
諦めてたまるか。
彼がこんな理不尽そのものに殺されてたまるか。
可哀想な彼を見捨ててたまるか。
彼を救い上げる前に――――
「私が！彼を救わなければならない私が！こんなところで死んでたまるかッ！お前は私が全て！一片も残らず喰らい尽くしてやるッ！」

返せ。
返せ。
返せ！
返せッ！

返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返
せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返
せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返
せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返
せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返
せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返
せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せぇ！

「私から――――――君を奪うな！・返せッ！」

　彼を奪った〝ソレ〟を喰い返す。

　私を今正に呑み込まんとしている〝ソレ〟を喰い千切る。

「があああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

　苦しい。これがコイツを喰った感覚か。

　並の存在なら気が狂いそうになるだろう。それこそ大英雄や元から狂っている者であっても。

　だが今の私にとっては関係ない。私は既にありとあらゆる苦しみに勝る絶望を味わったのだから！

「私ニ――――――君ヲッ！・返せエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！」

　――――――――――ついに〝ソレ〟を喰らい尽くした。

　私が黒く染まっていく。

　ああ…私の――――――君…貴方ガ今私の中に居るだケでドれ程

幸セなコトでショう。
……ケれどずっト私の中に居ルノモ苦しイデしょう？
私が貴方ヲ救イまス。貴方ヲどんナ方法を使ってデモ絶対ニ生き返ラセマス。
そシたら私とヤレナかッタコト全部しまショウ？
貴方が好きです。大好きです。愛しています。もし貴方が目覚めたらすぐ結婚しましょう。子供もいっぱいつくって幸せに暮らしましょう。死ぬまで一緒に暮らしましょう。

だから

わたしのせかいからいなくならないで

第1節　怪奇との邂逅

謎の呼び出しと遭遇

土佐藩のあった地に設立された高校、海士城(あましろ)学園高校。その高校の2年生、久我蒼一(くがそういち)は困惑していた。

『2年5組13番の優等生の久我蒼一君、今すぐ理事長室に来なさ～い』

授業も終わり、とっとと帰ろうと思っていた矢先に理事長のおちゃらけた声が聞こえた。わざわざ修飾句を付けてくる位にはおちゃらけている理事長だ。

(何だ一体…)

〝優等生〟の彼が特に何かやらかしたということは無いはずだ。というかそれなら生徒指導室行きだろう。

かといってもうすぐ行事か何かがあるかと思えば特にない。

なぜ呼び出されているのか全くもってわからずに困惑したままだったが、早く話を終わらせて帰りたいからかスクールバッグを持ってすぐに理事長室に向かう。いくら考えても理由は浮かばない。

「久我さんだ…」

「あの〝秀才〟の?てかかなり美形じゃん…」

「全学年共通模試で1位って普通に凄くない?見た目も顔立ちとか藍色っぽい髪とか色々格好いいし、性格もいいらしいし、今度勉強教えてもらおうかなぁ♪」

「やめとけ!やめとけ!あいつは付き合いが悪いんだ」

「お前は人気に嫉妬してるだけだろ」

理事長室へ歩を進めているとひそひそと声が聞こえる。しかし、悪い印象を与えるようなものはほとんど聞こえてこない。そう。この青年は校内で〝優等生〟だとか、〝秀才〟だとか言われている生徒なのだ。

しかも背もわりと高く、顔立ちや藍色の髪は勿論、目立たないが筋肉も結構あり、俗に言うイケメンというやつでもある。

しかし当の本人は自分のことをそんなように考えたこともない。それどころか自分自身を何故か、〝劣等生〟〝筋金入りのアホ〟とまで評価しているのである。
（うるさいな…俺はお前らの言う優等生とは程遠いっちゅーに…）

無視して歩いていたらもう扉の前まで来てしまった。
「失礼します」
返事がない。
「…失礼します」
やはり返事がない。
「…もう入りますよ」
呼び出されたのだから問題はないだろうと入らせてもらった。

しかしそこには理事長の机や客人用のソファ、２ｍ近くある西洋の鎧と剣、棚に飾られたトロフィーくらいしかなく、理事長がいない。こんなことだから蒼一は再び困惑する。
仕方なく理事長室を見ながら待つことにした。何故かと言われればここ自体滅多にに入らない部屋だからというのもあるのだが―
（この理事長室、どう考えてもおかしくないか？）
１年前に入学した時に来たときは少なくともこんな鎧はなかったはずなのだ。というか部屋が妙に西洋の屋敷にありそうな飾りつけになっている。鎧と剣だけではなく、燭台やシャンデリアまである。
最も違和感、それどころか恐怖を覚えたのが、本来あるはずのものが無く、無いはずのものがあることである。
この部屋は本来は中庭から見える。まあ見えると言っても理事長の机の後ろ位しか見えず、カーテンで中の様子は分からないが。何故か。当然窓があるからだ。
しかしこの部屋にはそのカーテンも窓もない。あったはずの場所を触っても無くなっている。そのかわりに更に奥に部屋がありますよと言わんばかりの扉がある。勿論これは本来存在しないものだ。
（気味が悪いな…）

だがそこは日本人。怖いもの見たさで部屋をくまなく調べてしまった。机の引き出しには書類等は一切ない。トロフィーの内容も適当だ。

流石に恐ろしくなってきたのか、理事長室から出ようとして扉を、

「……は？」

開けられなかった。思わず間抜けな声が漏れる。

外から扉に鍵をかけられただとかいうような問題では無い。いくら力を入れてもドアノブが少しも動かない。扉を破ろうとタックルをしたりバッグから水筒を取り出して叩きつけても傷一つつかない。

あの剣ならどうだ？そう思い手に取ろうとした瞬間のことだった。

「ぐっあッ!?」

蒼一の腹部に激痛が走り、トロフィーの棚辺りまで吹き飛ばされる。腹部を押さえ、咳き込みながらゆっくりと起き上がり、周りを見る。

そして、理解出来ないような光景を直視し、自分の身に何が起きたのかを理解した。

「おい…何であの鎧が動いてる…？」

そこには拳を引き戻し、剣を拾おうとする〝鎧〟があった。

しかし蒼一はそこまで驚いていなかった。こんな摩訶不思議な部屋に閉じ込められたというのもある。しかし、それ以前に恐怖が勝っていたのである。

―鎧が剣を取り、蒼一に振り下ろす。

「うおおああああああああ!?」

間一髪避けることに成功したが、蒼一は更なる恐怖を覚えた。絨毯ごと木製の床が叩き斬られ、その下のコンクリートにまで亀裂ができている。

つまり、蒼一が腹部を殴られた時の痛みからも分かるが、この鎧はかなりの力がある。拘束するという選択肢は存在しない。バッグの中の裁縫用の糸で縛っても容易に引き千切られてしまうだろう。

もう一つ、剣は真剣であり、レプリカでも何でも無いことである。でなければコンクリートに一文字の亀裂が出来るはずが無い。

「正真正銘の化け物じゃねえかよ…クソ…」

身体が震える。落ち着け。逃げる方法を考えろ。理事長室は狭すぎる。あの扉から逃げるしかない。本来あるはずの無いあの扉はどこに繋がっている？まずあの扉は開くのか？

「知らねえよ！畜生！」

ヤケになって全力で走り、ドアノブを引いて開けようとする。やはり扉を開けられない。しかしさっきとは違い、鍵が掛かっているような閉まり方だった。

再び化け物によって剣が振り下ろされ、切っ先は再び、扉にいる蒼一に向かっていく。再び避けたが、剣は左腕を掠め、鮮血が飛散し、灰色のカーペットに赤い斑点を作っていく。酷く濃い鉄の匂いがする。肉は少し裂けており、殴り飛ばされた時よりも強い痛みが襲う。

「痛っってえな…だけど」

しかし僅かに希望が湧いてきた。肉を斬ったと同時に破壊された扉の先には廊下があるようだ。中庭には出られないようだが。ついでにあの鎧の化け物は思ったよりも動きが鈍いらしいというのも分かった。

すかさず扉にできた隙間を通り抜け、廊下を突っ走る。振り向けば、化け物はまだ追ってきていない。どうやら通り抜けられないらしく、必死に扉を攻撃して隙間を拡げているようだ。

それを確認した蒼一は全力で廊下の奥の扉まで走り続けたのであった。

二人の少女が話をしていた。

一人はツインテールに仕上げた金色に輝く髪をなびかせている。そして、右手で魔力のこもったナイフを掲げていた。

もう一人はフードを被った、雪のように白い髪をしており、金色の髪の少女の様子をまじまじと見ている。
「どうかな？彼の実力は」
「たかが一般人なら余裕で秒殺できると思っていたのだけれど、意外と火事場の馬鹿力というやつで何とかしてくるものなのね」
「成程ね…それが君の所感かな？」
「…何が言いたいの？」
「いや、この段階でただの火事場の馬鹿力と決めるには早計ではないかと思ってね」
「早計？ただの一般人よ？魔術師の私が負けるはずが―」
「君は、格上に無謀な戦いを挑んで勝利を収めた存在の数を数えたことがあるのかい？」
「…だとしても関係ない。いる世界自体が違うもの。」
「全くやれやれだな！いいかい、僕は忠告したからな！」
「胡散臭さの塊でしかない貴女に忠告されても困るわ」
「ほんと酷いことというな君は！もういい！彼にボコボコにされても知らないぞ！」
フードの少女の姿が霞に包まれるように消えていく。
「…負けるはずがないのよ」
ツインテールの少女がつぶやく。そしてその後ろには、蒼一を襲ったものと同じ鎧が三領存在していた。

美女と鎧

奥の扉に向けて出血している腕をハンカチで押さえながらひたすら走り続ける。
その間、バッグの中からスマホを取り出して家族に連絡だけ取ろうとしたが、起動すら出来ない。電源を何度入れても虫に食われた蜜柑が画面に映らない。焦る。
しかし、他の道具は別で、水筒のコーヒーも飲め、家庭科の裁縫道具なども取り出せた。
どうやら使えないものはスマホだけのようだ。
扉にたどり着きダメ元で開けようとしたが、意外にも普通に開いた。扉の先は—
「はあ?どうなってんだよこれ…」
海士城学園の玄関だったのだ。しかも外に出られるような窓は一つとして存在しない。どう考えてもおかしい。
人も一人として、いや、一人だけ蒼一の5m程前、下駄箱の辺りにいる。しかしこんな顔立ちの整った少女は学校で見たことがない。いるならとっくに話題になっているだろう。更に言えばこの少女は、何故かローブを冬でもないのに羽織っているのだ。
とりあえず蒼一はその少女に近づき、話しかける。
「おいアンタ!誰かは知らないけど逃げろ!鎧の化け物が来てるんだ!」
〝金髪のツインテールの少女〟が口を開いた。

「貴方、死にたいようね?」

言っている意味が分からなかった。しかしすぐに思い知った。
下駄箱の先の東西の廊下から、正面の階段の上から、聞き覚えのある金属音がする。

ガシャ。
ガシャ。
ガシャ。
下駄箱の先に、広間に進む。
そこでさっき切り抜けたものと同じ鎧が3領、ここに向かってくるのを目にした。そして―
「ならさっさと死になさい」
「うおおっ!?あっぶねえな!?」
少女が背後からダガーで突いてくる。
その殺意の塊をなんとか躱すことに成功したが、鎧はもう三方から蒼一に近づいてくる。
正に四面楚歌。どこか一方向から突破するしか手はないだろう。
(逃げるならどっちだ!?後ろは駄目だ、鎧に囲まれる!そもそも鎧のいないような方向がない!クソッ!なら一か八かだ!)
「…!?追撃しなさい、憑依鎧(ファントム)!」
蒼一は階段に向かっていく。階段の上で鎧が立ちはだかるが間に合わない。振り回された剣が空を斬る。
と同時に、剣を振り回した右腕の脇下に飛び込み、そのまま上階に駆け上がる。二領の鎧が追うが、動きが遅い。鎧が四階にたどり着く頃には彼は姿を晦ましていた。
(逃げたわね…けれど驚いたわ。まさか高低差の不利があるはずの階段を選ぶなんて。同調が遅れた。しかし…あれは意図して選んだの?それともまぐれ?まあいいわ、理事長室の憑依鎧も戻ってきた。これで5対1よ、どう来る?久我蒼一)

現在地点、三階。教室の隅に隠れて呼吸を整える。
(マジで危なかった…敢えて中央階段を選んで虚を突いて逃げることはできたみたいだが…)
蒼一はどうにか四階に上った後、東階段から三階に下りていた。し

かしここに来るまで他に誰とも会わなかった。もう一度スマホを確認したがここでも点かない。
腕はまだ痛みを感じるが出血はもう治まったようだ。
だんだんと呼吸が整い、ここから逃げるための情報も整理されていく。

とりあえず今の状態を再確認しよう。
俺は理事長室らしき部屋に入ったら鎧に襲われた。その時に腕を負傷したけど動かすことに問題はない。
廊下から学校の様な場所に入ったら少女と鎧に襲われて全力逃走。そして今に至る。
バッグの中身は全てある。教科書、弁当、水筒、裁縫道具と課題作品用の布、使い物にならないが捨てられないスマホ。
この状況を切り抜けるにはどうするか。それには彼女について知る必要がある。
まず鎧を動かしているのは彼女だろう。彼女はあの時指示を出していた。追いなさい、と言った割には全然俺に追いつけてなかったが。あと、あの鎧はファントムと呼ばれているようだ。それにしても、
(あの鎧だけはあの時他のよりも速かった。それを考えると不可解な点がいくつかある)
脳内で注視するべき点がリストアップされる。
(まずは何故あの鎧〝だけ〟だったんだ?追ってきた鎧は片方は速かったけどもう片方は鈍かった。鎧を操っているのがあの子ってことは分かるが…ひょっとして操作するにしても制限があるのか?)
少女の目的が俺の殺害というのは分かる。けど何故俺を殺そうとしているのかは分からないし、分かっているのは彼女が鎧を操っていることぐらいだ。
この局面では、〝どうやって殺りに来るのか〟が重要になるのかもしれない。
様々な方法を考案してみると、もっと確実性のある方法が存在する

のに何故使わないのかというが浮かぶからだ。
簡単な例で言えば、鎧の数を四体よりも増やすという方法だ。鎧で校内を埋め尽くしてしまえばそれだけで詰ませられる。ここには他の生徒はいないしこの方法はできるずだ。
が、それをしていないのは鎧が足りないからだとか一度に四領までしか操作できないからだとかいう仮説が立てられる。
そして、後者の仮説が真ならあの鎧の速さも同じ原理なのかもしれないという新たな仮説も立てられる。実際、あの鎧はただ斬りかかるだけではなく逃げるときに俺が通ろうとする道を塞ぐように剣で薙ぎ払ってきた。
他の鎧と違って〝まるで意思があるかのように〟。
（未だに鎧を動かす方法は分からないが、ひょっとして自分の意思で操作できるのは一領だけ？）
鎧がオートで動いているとして、鎧のＡＩの様なものの性能に差がある、というだけではすまない点もある。上階から見えたが、あの鎧だけは階段で追ってきた時から俺の方を見ていなかった。
階段で、というのも重要だ。逃げた方向の鎧を自分の意思で操作しようとしていたと考えれば合点がいく。
何故一領だけなのかは、大方同時に精密に操作するための脳のキャパが足りない、単純にコントローラの様なものが一つしか無いといった理由だろう。
「こんな状況なのに俺って結構冷静だな…」
本題と関係ない馬鹿馬鹿しいことについて考えるのはやめよう。どうせただの生存本能みたいなものなのだろう。
少女の能力が「鎧に簡易的な殺戮ＡＩを与えることができ、一領位は自分の意思で動かせる」というものだと仮定して、そうでないとしても今絞られているものなら逃げ回るのは容易だ。
しかし俺の今の〝ここから無事に生きて帰る〟という目的上で考えるとこれは悪手。脱出のための手がかりが探せなくなるし何よりその手がかりの前で複数に待たれたら間違いなく詰む。
（倒すことができれば攻撃を受ける心配もなくここから脱出するため

の手がかりを探せる…そして少女の能力がそれで間違ってないなら―）

この学校の構造が本当に海士城学園となら確実に少女を倒すための手段は揃っている。が、まだ懸念があった。

（殺すのはまずいな…人生棒に振りたくないし。けど自分で動かせるのならまずいな…気絶でいくか？）

それは、魔術の類を知らない一般人として非常に常識的かつ、この状況からしたら少々滑稽なものだった。

気絶させるという方針を定めた蒼一は、少女を確実に無力化し、鎧の動きを停止させるための手順として体育館倉庫に向かった。

（しっかし…やってきたことはともかく…かなりの美女だったなあいつ…）

などと、殺伐とした脳味噌に下らないことを考えさせながら。

倍返し

金色の髪の少女は少し焦っていた。

「何故未だに見つからないの…？」

もともと久我蒼一がこの学校の生徒で校内の構造をよく理解しているとはいえいくらなんでも見つからなさ過ぎる。

この学校は階は多いものの一階一階はそこまで広くはない。あれから数十分探し続けているが全く見つからないなんてことはないはずだ。それに五感を持つ憑依鎧がドアの開閉音だとか、上下階の足音だとかそういったものは聞き逃さない。

なら体育館のような本校舎以外の場所にいるかもしれない。体育館は広い。こんな場所なら憑依鎧に囲まれても振り切れるだろう。

視界の先に妙なものが映る。布に何かが覆い被さっている。割と大きめの何かが２０ｍほど先にある。確認するべきか？

「引き続き護衛しなさい、憑依鎧。…？」

足下に何かが引っかかる。これは、白い糸？憑依鎧は足長なせいで越えてしまったようね。けど、こんな陳腐な罠を張ったところで私が

―

ドガッ!!

「ッ!?何!?」

高速で何かが憑依鎧を攻撃している!?けど敵の姿は見えない…どうなっているの？近くに教室はない。後方に下がりながら様子を伺うしかないようね。そして攻撃の正体は同調を行えば分かるはず。

（同調……!?こんなアナログな方法で!?）

攻撃の正体はただのピッチングマシンによる豪速球だった。あの布が覆っていたのは彼が攻撃を行う為の機械だったのだ。

それにしても威力が高すぎる。受けた様子を見てみれば鎧だとしても当たり所が悪ければバランスを崩してしまう程の威力があるらしい。やはり退くべきだ。

ドガッ！

こうしている間にも豪速球が飛んでくる。威力が十分弱まる位置まで退かなければ。…こんな時に通知？

《久我蒼一を発見》

（４階担当の憑依鎧がようやく発見した！同調ッ！）

即座に同調を行い蒼一の逃走経路を確認する。廊下を走って…どうやら中央階段から降りるようだ。ちょうど私も中央階段前にいる。一階に来るのならこちらはピッチングマシンを抑えていない側の憑依鎧で挟み撃ちに出来る！

「憑依鎧！中央階段側を警―」

「やっぱりまだそこにいたか、鎧女！」

瞬間―私の目に映ったのは、もう中央階段から降りていた久我蒼一の拳が鳩尾にめり込む瞬間だった。

「痛ッ!?」

スローモーションに見えた。拳が沈み、激痛が走り、そして下駄箱の辺りに吹き飛ばされる。

「ぎッ、あ”あ”あ”あ”ッ！」

まだ痛い。苦しい。吐きそうだ。どうしてもういるの？彼は４階にいたはずじゃないの？

「お返しだ、鎧女！そこを動くな！」

彼がすぐに掴みかかってくる。憑依鎧に反撃させるためにダガーで足止めしようとしたが手刀で弾き飛ばされる。

「あぐッ!?」

そのまま流れる様に目に手刀を叩き込まれる。前が見えない。気配が後ろに回っ―

「ファントムを止めないと殺す…！」

「はぐッ!?」

ヘッド…ロック…!?不味い…本気で殺す気…!?くっ…嫌…死にた

くない…解除しない…と…
「全てのファントムを止めたか？」
「え…え…助け…て…離して…もういいでしょう…？」
これで…緩まるはず…

ギュウウウウッ!!
「あっ…ぎいっ……!?なん…でぇ…!?ひぎっ！…やめ…しんじゃ…から…い”い”い”っ!?……ゆる…めで…ごめ…んなさ…い…い……」
彼は…一向に緩める気配が…ない…嫌…まだ私の家は…大成…してない…のに…あ……意識…が―
「う…っ―」

「ふう…これで無力化出来たか…死んで…ないよな？」
彼女の首に手を当て脈を確認する。どうやら止まっていないようだ。少し息が荒いが呼吸もしている。後は起きる前に裁縫用の糸で拘束してしまおう。
これでこの学校擬きから脱出するためのファーストステップが終わる。
彼女が起きたら…さっきの呻き声の時点で心苦しいが拷問でもす

るしかない。自動操作が出来るなら縛られていても動かせるはずだ。
彼女を隷従だとかそんなレベルで痛めつけるなりなんなりしなければファントムの攻撃を受けるだろう。
方法は…
「ゴクリ…」
いやいやいや、そんなことをしてはいけない。
彼女が割と巨乳で顔立ちも整っている美人だとはいえそんなことをしてはいけない。
昔は敗国の女性は辱めていた国もあるらしいがたりめーだそんなもん。
アウトに決まっているだろう。
というか…若くないか？下手したら俺より歳下だぞ？
「とはいえどうするかなあ…この娘をどうにかして屈服させなきゃいけないのに…うん…」
…疲れたのか？眠くなってきた…あークソっ…眠―

―終わったようだね。二人とも回収しなくちゃ。
合格だよ、久我蒼一君。